みんなで語ろう民放史

題字　中川　順

戦争の負の遺産を伝え続けて20年

長谷川テルの肖像『失くした二つのリンゴ』への歩み

尾崎祈美子（RCC）

テルの娘・暁子さん（右）と筆者

これまでの『みんなで語ろう民放史』は、会員が語る過去の民放外史でしたが、今、記録しておくべきこともあるのではないか、放送をとりまく環境が厳しい中でがんばっている現場の声があってもいいのではないかという提案があり、今回は「現場からの発言」としました。

第一回はＲＣＣ中国放送で戦争の負の遺産を数々ドキュメンタリーで追い続ける尾崎祈美子さんです。（編集委員会）

去年二月、財団法人・民間放送教育協会（民教協）スペシャルとして私が制作した『失くした二つのリンゴ』という六〇分のテレビドキュメンタリーが全国放送された。副題は「日本と中国のはざまで　長谷川テルが遺したもの」。

長谷川テルは一九一二年、山梨県に生まれた。奈良女子高等師範在学中にサークル活動でエスペラント運動にのめりこんだのが原因で、治安維持法で検挙され、卒業目前に退学を余儀なくされる。

日中戦争前夜、東京高等師範に留学中の満州出身のエスペランティスト劉仁と結婚。自らの意思で中国にわたった。

二人が上海のフランス租界の小さな部屋で新婚生活を送ってまもなく、日中戦争が始まる。上海はたちまち戦火に包まれた。テルはタイプライターに向かって日本の中国侵略を世界に伝える。

「この国際都市を炎が覆っている。恐怖と不安の叫び声が上がる。私の心は叫ぶ。両国人民のために戦争をやめろ。私は日本を愛している。祖国だからだ。私は中国を愛している。新しい故郷だから」。

戦争の激化とともに二人は重慶に移る。

重慶では日本軍の無差別爆撃で多くの非戦闘員が殺されている。

そうした悲惨を目の当たりにしたテルは、ラジオ放送を通じて戦争をやめるよう日本軍の前線兵士たちに訴えかけた。

「誤って血を流してはなりません。皆さんの敵は海を越えたこちら側にはいないのですから」。

これに対して、当時の都新聞はテルを「売国奴」と名指しで糾弾したが、テルは「お望みとあれば、どうぞ私を売国奴と呼んでくださっても結構です。私はこれっぽっちも恐れはしません。むしろ、私は他民族の国土を侵略するばかりか、なんの罪もない無力な難民の上に、この世の地獄を現出させて平然としている人々と同じ民族の一人であることを恥とします。本当の愛国主義は、人類の進化と決

長谷川テルと夫劉仁

して対立するものではありません」と毅然とマイクに語りかけた。

番組は三四歳でなくなったこの国際エスペランティストの生涯を、遺児の暁子さんの目を通して描き、「戦争とは」「平和とは」「家族とは」「個人の幸福とは」を問いかけたものだ。

一九四七年、テルが亡くなったとき、娘の暁子さんはゼロ歳。テルに続いて父親の劉仁もあとを追うように同じ年死去。暁子さんは生後一〇ヶ月から孤児院などを転々として育ち、文化大革命など激動の中国現代史を生きぬく。現在は日本に帰化して大学で中国語を教えながら静かな生活を送っている。

その暁子さんが六〇年の歳月を経て自分の歩いてきた道を振り返る手記に取りかかったことがきっかけで、母の面影をたずねて中国への旅に出る。やがて見えない絆に導かれながら、自分の半生と母の人生を重ねていく―。

番組がギャラクシー賞を受賞した時、選奨委員の藤久ミネさんは「この番組のすばらしさは、テルの硬質で理念的な生涯を、遺児暁子（中国名・暁嵐）さんのみずみずしい感性と哀切な追慕の情とを通して描いたことにある」と書いてくださった。

作り手以上にこの番組の本質をみつめて下さっていることに心がふるえた。

開局第一声は平和の鐘と共に

私は一九八六（昭和六一）年に、広島・中国放送に入社した。

中国放送は一九五二年、原爆の焼け野原に復興の息吹が高まるなか広島で最初の民間放送局として産声を上げた。開局第一声は「平和の鐘」とともに放たれた。戦後の日本に平和が甦ることを願って建設された世界平和記念聖堂の鐘の音が鳴り、アナウンサーがそれに続いた。「JOER、JOER、こちら一二六〇KC。皆様のラジオ中国です。ただ今から本放送を開始します」。

ちなみに開局アナは旧満州出身の引揚者。社員の多くは被爆し、あるいは家族を戦争でなくしていた。平和を願う諸先輩の思いが戦後の放送を創って来られたと信じているので、この開局のエピソードを思うといつも胸がジーンとする。

毒ガス取材で学んだこと

入社した当時から、私の眼はアジアに向いていた。

当時は週一回放送の三〇分のドキュメンタリー枠があり、先輩たちが腕をふるっていた。

最初に自分の企画が通ったのは『鎮圧～毒ガス戦の幕開け』（一九九〇年八月放送）という台湾・霧社事件をテーマにしたドキュメンタリーである。番組では広島県・大久野島で極秘に製造された毒ガスが植民地下の台湾の先住民族（タイヤル族）に対して使用されたかどうかに焦点をあてた。

＊霧社事件（編集委員会・注）

１９３０年10月27日朝、台中州霧社公学校の運動会に集まっていた日本人をタイヤル族の一派が襲い、子供を含む百余名が犠牲になった。

霧社は日本当局が先住民を優遇し鎮撫に努力した模範地区だった。にも変わらず、一斉蜂起があった背景には、現地駐在日本人官憲の横暴に対する反発があった。

軍の参謀は「蛮人は一人も生かしてはおかぬ、毒ガスで皆殺しだ」。

州知事は「人道的に絶対許せない」と反論したが…。

《凶蛮の全滅を期して
愈よ飛行機から毒瓦斯…》

一一月二日「台湾日日新聞」の見出しである。

その番組をきっかけに「もう一つのヒロシマ」と言われる「毒ガス」の取材を続けた。

広島県・竹原市沖に浮かぶ大久野島は、周囲四キロの小さな島だ。戦時中はアジア最大の化学兵器工場があり、軍事秘密保持のため地図から消されていた。

毒ガス工場で働いていたため、戦後も後遺症に苦しみ続ける人々。彼らが「お国のために」と命を削って製造した毒ガス兵器は、中国戦線に大量に持ち込まれていた。それは遺棄毒ガス弾となり、戦後も中国の人々を傷つけ続けていた。

その事を身をもって示したのが遠藤力男さんである。腕のよい配線工だった遠藤さんは、戦後になってから大久野島に行き、びらん

性の猛毒ガス「イペリット」工室の解体処理を命じられた。知識がないまま防毒マスクも付けず作業を行い呼吸器に重度の障害を負った。軍との雇用関係がない事から毒ガス手帳がもらえず何の補償もなされなかった。このため妻の貴志子さんが働いて家計を支えてきた。ある日、長年連れ添った妻に苦しい息のなかから「幸せだったよ。ありがとう」と声をかけた。その数日後この世を去った。

遠藤さんは人としてどう生きるか、を私に教えてくれた大切な一人である。

そうした事実を私は、『悪夢の遺産～毒ガス戦の果てに　ヒロシマ～台湾～中国』（一九九七年、学陽書房）として本を出版し、また、世紀越え特番として制作した『眠る島～二〇世紀の戦争廃棄物・毒ガス』（二〇〇〇年一一月放送）などを通して伝えてきた。

『眠る島～20世紀の戦争廃棄物・毒ガス』―あらまし―

大久野島の、工場で働いた多くの人は毒ガスの後遺症で亡くなったり、いまなお闘病生活を続けている。村上初一さん（75歳）もかつて島の毒ガス工場で働いていた。

日本の毒ガス製造の事実は、戦後の東京裁判でも免責されたのである。日本政府は化学兵器禁止条約の締結までこの事実を公式かつ国際的に認めてはいなかった。

日本は一九三七年以降、中国各地で毒ガスを使用し、敗戦時に使い残したものを遺棄してきた。毒ガスの回収作業が二〇〇〇年九月から本格的に始まり、費用は全額日本の負担。一方、大久野島の毒ガスの処理は敗戦後わずか一年で作業終了。

大久野島
（広島県竹原市沖）

一九六三年には、島に日本最初の国民休暇村が開かれた。以後、何度も遺棄弾が島から発見されたが、そのたびに行政は場当たり的な対応を繰り返し、さらに大久野島をエコアイランドとみなす観光計画が実施されようとしている。

「国民にはなるべく隠して廃棄物の処理を」。そのような歴代政府の動きを個人として監視してきた村上さん。時には怒り、恐れ、時には逃げ出そうとしながらも自分がかかわった現実と向かいあってきた。その村上さんが、実際に遺棄毒ガス弾の中国人被害者と出会うことでの心境の変化。大久野島に残された毒ガス処理を地元の行政や政府に訴え続ける。番組は彼の姿を通じて、20世紀の戦争廃棄物・毒ガスの誕生の理由と処理の方法の是非を考える。

毒ガス取材を通して私が肌で感じ取ったのは、国籍や思想信条、人種を問わず、「敵」であれ「味方」であれ、戦争によって傷つき殺されるという点では同じだということ。そしてその苦しみは戦後もずっと続くということだった。

原風景としてのヒロシマ

私は瀬戸内海に面した広島市で生まれ育った。広島の街は絶えず生と死を私に突きつけてきた。小学生の頃、体育館の建て替え工事があり被爆者とみられる人骨が次々に出てきた。足元のそこここに骸があるように感じられ、街を歩くのがこわかった。

学校の授業や身近な大人たちの話、新聞やテレビのニュース等から原爆のことを見聞きした。大人はなぜ戦争をするのだろうか。なぜ原爆を作ったり、落としたりするのだろうか。そう思いながら自分もいつしか大人になり、いのちを身ごもり、母となった。

毒ガスの問題を取材し続けた根底には、非戦闘員であろうと無差別に攻撃する大量殺戮兵器への嫌悪感と怒りがあったのだと思う。

二〇年…テルを心に抱いて

学生の頃は、祖国に反旗を翻して戦争反対を叫んだ長谷川テルの強さに心惹かれ。卒業論文もテル

を選んだ。だが少しずつ人生経験を重ねるなかで、弱さも含めたテルの人間像に迫りたいという気持ちが深くなっていった。

『失くした二つのリンゴ』は、長谷川テルが病床で書いた長編詩のタイトルである。

詩句には、祖国から裏切り者扱いされながらも中国大陸で抗日運動にかかわったテルが、母親を思う痛切な叫びがあふれている。

詩の冒頭に「英ちゃん」とあるが、テルの中国でのもう一つの名が緑川英子だった。

「リンゴ」は幼子の赤いほっぺたの意味…。愛する夫の国である中国で、愛する祖国の兵隊たちが、幼い子供たちを殺している。

「英ちゃん」突然母は今まで聴いたこともないような　厳しい声で
私を呼んだ
「あたしがせっかくお前に上げた
二つのリンゴ（赤いほっぺた）は
どうして見えなくなってしまった
の」
「それは、お母さん…」
私は悲しく自分の蒼白い頬を押さえた
上海の時はリンゴはまだあったの
よ
それからはお母さんもご存知のように　広州にも　漢口にも　重慶にも　どこにもリンゴはなかったから
とうとう私は自分のリンゴを食べてしまったの

母親からもらった二つのリンゴを失くしてしまったテル。しかし、あなたからもらった「誇り」だけは失くしてはいないと訴える。確かにリンゴは失くしてしまったけれど、それは仕方のないこと、許して欲しい。こんな一節もある。

母よ！母よ！
私の愛する人はあなただけなのだ。
でも、私はあなただけのものではない。
この残酷な戦争の中で、涙と呻吟と呪いの暴風雨の中で、こっそりと自分だけの小さな幸せにひたることはできない。

「英雄」でも「売国奴」でもない、平和を求めて生きる生身の人間としての彼女を記録し、伝えたいと思った。

日本人が戦争に飲み込まれていった時代、一人の女性として母として娘として、何を感じどう行動したのか。

広島の報道現場で働くなかで、テルの存在はずっと胸に秘めていた。

全国発信へのチャレンジ

七年前、放送文化基金の会報紙『わ』の取材を受けた。

「中国放送ではドキュメンタリーを放送する枠はあるんですか？」との村木良彦さんの問いかけに、私は次のように答えている。「今はレギュラーの番組枠はありません。でも自分自身に本当に作りたいテーマがあって、本気でつくってみんなに伝えるんだ、伝えたい！という気持ちがあれば、きっと道は開けると思っています。私にとっては本当にそれだけの覚悟があるかどうかが大切なんです」。

いつかは長谷川テルを番組にしたいと思っていたが、広島との直接の縁はなく、年々予算が厳しくなるなか、番組化は困難にみえていた。

それでもせっかく放送局に入ったのだから悔いのないように表現者としてチャレンジしようと一念発起して、民教協が行う番組企画コンクールに応募したことで扉が開かれた。

母テルさんの足跡をたずねる
暁子さん（上海）

長谷川テルは、中国では教科書にも登場する著名な「国際主義戦士」「革命烈士」で、革命記念館に紹介コーナーが設けられたり、絵葉書になったり京劇の主人公として描かれたり、中国・中央電視台が戦後60年特集で制作した番組のテーマで取り上げられるなど歴史的人物として扱われている。一方日本では、時代に抗ったことで、「売国奴」「非国民」のレッテルを貼られ、今もほとんど知られていない、埋もれた存在なのだ。

北京オリンピック開催前年、暁子さんと上海、武漢、南京、重慶、北京、そして中国東北部のハルビ

ン、ジャムスと、七都市を二週間かけて取材した。

エンドタイトルに込めた思い

『失くした二つのリンゴ』ではエンドタイトルにも思いをこめた。

長谷川テルが命がけで取り戻そうとした日本と中国の平和。戦後、二つの国がどのように歩んできたかを、映像を淡々と見せることで表現したかった。

エンドロールが流れるバックに約九〇秒間、アップにした日の出の太陽の長回しカットを使った。そこに左右両翼になるよう、日本と中国各々の戦後の歩みが、過去から現在へと、走馬灯のようにあらわれては消える。

終戦直後の重慶、そして被爆直後の広島。復興していく街と人々の営み。やがて中国の核実験とその成功を歓喜乱舞する人民解放軍兵士たちの姿があらわれ、広島市では平和大通りを戦車に乗った自衛隊員がパレードする映像に変わる。

その次に挿入したワンカットには、私のこだわりがあった。広島市平和公園の原爆慰霊碑前での乱闘を撮影した映像。これは一九六三年八月五日、「中国の核」をめぐる論点の対立から、日本の原水爆禁止運動が分裂した日の記録である。

分裂した原水禁騒動

第九回原水爆禁止世界大会は、「いかなる核にも反対」ということをめぐって、社会党・総評系と共産党・一部中立系との間で、激しい対立が起きた。

日本人にとって共通の世論であった原水爆禁止運動が二つに分かれた日。「過ちは繰り返しませぬ」と記された原爆慰霊碑の前で争う人びと。

この映像は私の心のなかにいつもあった。なぜなら、原水禁運動が二つに分裂したその日に、私はこの世に生を受けたからである。

父が遺した言葉

私事で恐縮だが、番組完成直前の去年の一月、父が亡くなった。

父の通夜が行われた一月一〇日は長谷川テルの命日でもあった。

父の骨を拾ったその足で新幹線に飛び乗り、MAのために上京した。

女優の吉行和子さんは私の事情をすべて受けとめてくださり、テルの内面と響きあったナレーションで、番組に生命を吹き込んでくれた。観る人の心に深く届いてほしい。音楽にもこだわった。テルの詩を元にした、二胡によるオリジナルの歌曲も使うことができた。

「難しいテーマだから情感を大切に伝えたらいいと思うよ」。それが亡くなる一〇日ほど前、父が私に遺してくれた言葉だった。

十代の多感な時期に戦争を経験した父は、病院のベッドでずっと私の仕事を応援してくれていた。この仕事が一段落したらゆっくり見舞おう、ずっとそばにいようと思っていた。

結局、その約束も果たせないまま、父は逝ってしまった。

悲しみと歓喜を同時に経験した日々がまだ痛みを伴って蘇える。

核と毒ガス、負の遺産という硬いテーマを、いかに人の心の柔らかい部分にまで届けて未来をつくる智慧に変える触媒になり得るか。それが父から出された宿題のように今は感じている。

長編詩『二つのリンゴ』はこんな言葉で終わります。

でも母よ
たとえあなたの娘が、
大事にしていた二つのリンゴを永遠に失くしてしまっても、
叱らないで欲しい。
愛する母よ、見ておくれ、
そのリンゴは、中国大陸で、日本で、世界各国で、
綺麗な赤い、赤いリンゴを永遠に実らせたいために、
先に落ちてしまった無数のリンゴの中の
二つに過ぎないのだ。

果たして長谷川テルの失くしたリンゴは、今、綺麗な実をつけているのでしょうか。

（資料：RCC中国放送）